

長崎港砲台図 財団法人鍋島報效会蔵 (佐賀県立博物館寄託)
—「近代化の軌跡—幕末佐賀藩の挑戦—」展出品 (本誌2-3頁参照)—

佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM · SAGA PREFECTURAL ART MUSEUM

20 September 1999

No. 123



展覧会案内

博物館平成11年度企画展

「近代化の軌跡—幕末佐賀藩の挑戦—」

平成11年10月29日(金)～11月28日(日)

江戸時代の終わり、佐賀では西洋のすすんだ科学技術を取り入れて、日本ではじめて洋式の鉄製大砲を铸造したり、蒸気機関の研究を行って蒸気船を建造したりしました。国内有数の技術水準を誇った佐賀藩は、大きな軍事力を持ち、薩長土肥と並び称される雄藩になりました。

この展覧会では、幕末の佐賀の人々が、新しい科学技術と出会い、努力を重ねてそれを獲得していった歴史を、絵図や古文書、当時つくられた模型などの資料を用いて、幕府や他の藩の事例もまじえながら紹介します。

I 長崎警備と佐賀藩

佐賀藩は、寛永19年(1639)以来、福岡藩と隔年で長崎警備に従事していました。長崎警備は、当番年には千人前後の藩兵を駐留させなければならないなどの経済的負担を伴いましたが、長崎を通じて海外の情報をいち早く入手できるというメリットももたらしました。



長崎警備図屏風 財団法人鍋島報效会蔵 (佐賀県立博物館寄託)

II 佐賀の洋学こととはじめ

佐賀での蘭学の導入は医学から始まりました。シーボルトに教えを受けた伊東玄朴や、橋本宗建らが蘭方医として活躍しました。

また武雄では、領主の鍋島茂義によって、西洋文化がいち早く受容されました。茂義は長崎の高島秋帆に入門して、洋式砲術の伝授を受けました。

武雄には、高島秋帆が天保6年に铸造したモルチール砲(白砲)が現存しています。



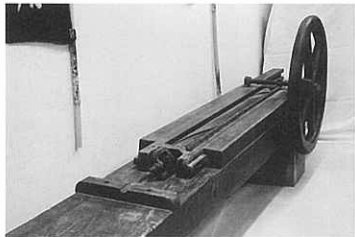
モルチール砲 武雄市教育委員会蔵

III 大砲をつくる

佐賀藩は、武雄の鍋島茂義を御砲役として高島流の洋式砲術を採用し、洋式砲の铸造についても研究を重ねました。

アヘン戦争で清がイギリスに大敗したことが伝えられ、オランダ国王から日本に開国を勧める書簡が届けられると、対外的な危機意識が高まり、佐賀藩では、長崎港の台場増築と増築した台場に据え付ける大量の洋式砲を铸造することが焦眉の課題となりました。

佐賀藩では、銅製砲より威力のある鉄製の砲をつくらうとしました。そのため、火術方の本島藤太夫を蕪山代官の江川英龍のもとに派遣して教えを請い、オランダの技術書の翻訳をもとにして、



鑄台 江川家蔵 (蕪山町立蕪山郷土史料館寄託)

嘉永3年(1850)7月、城下の築地において反射炉の建造に着手しました。はじめは鉄がうまく溶解しなかったり、試射で砲身が破裂するなど失敗が続きました。しかし、蘭学者たちの新しい知識と刀工や鋳物師らの伝統技術を結集することによって嘉永5年には鉄製36ポンド砲の鑄造に成功し、以後幕府や他の藩からの注文を受けるまでになりました。

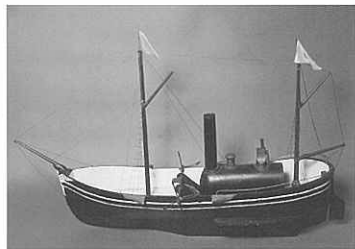


黒船来航絵巻 神奈川県立歴史博物館蔵

Ⅳ 蒸気船をつくる

佐賀藩の軍備強化におけるもう一つの大きな柱は、蒸気船を主力とする洋式海軍をつくることでした。嘉永6年(1853)のペリー来航後、幕府が大艦製造の禁を解くと、佐賀藩は直ちに蒸気船の構造研究を本格化しました。佐野常民を頭人とする精煉方がその中心となりました。精煉方は、火薬や硝煙の研究によって火術方の鑄砲事業を補佐するとともに、蒸気機関の研究に着手しました。

安政2年(1855)には蒸気船と蒸気車の模型を製



蒸気船(外輪船)模型 財団法人鍋島報効会蔵(佐賀県立博物館寄託)

作、運転することに成功しました。同年秋に長崎で始まったオランダ海軍の技術伝習にも参加し、操船だけではなく機械工学や数学や造船法などを学びました。

その後佐賀藩は三重津に造船所をつくり、蒸気缶(ボイラー)の修理や製造を行ったほか、慶応元年には小型の蒸気船「凌風丸」を建造しました。



トコトヤレ節 山口県立山口博物館蔵

Ⅴ 戊辰戦争と佐賀藩

ペリー来航以後、諸外国との外交交渉を経て事実上開国したあとも、国内は將軍継嗣問題をめぐる幕府内部の派閥争い、尊王攘夷派と公武合体派との対立など、政治情勢は激しく揺れ動きました。薩英戦争、下関戦争という2つの対外戦争、禁門の変、2度の幕長戦争を経て、薩摩・長州を中心とする討幕勢力が形成されました。

このような政局の中で、佐賀藩は去就を明確にせず、最終的に討幕軍に加わったのは、戊辰戦争が起こった後でした。上野や東北での戦いでは佐賀藩が装備していたアームストロング砲が威力を発し、勝敗を決しました。(学芸員 本多 美徳)



佐賀藩兵上野影義隊砲撃戦 西村慶介氏蔵(佐賀県立博物館寄託)

エッセイ

佐賀県内でのトキの剥製

今年、国内でトキの「人工孵化に成功」というニュースが広く報じられました。トキは国際保護鳥に指定されている種で、絶滅の危機に瀕しています。世界的に見てみると、中国のごく一部の地域に生息が確認されている状況で、日本国内では、野生のトキは絶滅したとされています。

トキはコウノトリ目のトキ科に属する鳥で、全長約77cm、翼開長（翼を開いた長さ）は約133cmになるといいます。水辺や湿地を生息環境としており、ドジョウ・カエル・タニシ・サワガニなどを捕らえて食べます。

トキは、東アジア一帯に広く生息していました。日本では、各地の民間伝承の中で、「鳥追い歌」のなかに、サギやスズメとともに田畑の三大害鳥として歌われています。このように、かつてトキは広く生息していたものと考えられます。また、トキの羽根は、弓の「矢羽」に使われていたという記録が各地に残っています。また、伊勢神宮の社宝の「須賀利太刀」のかざりには、代々トキの羽根が使われていました。このように、トキは古くから日本の民俗の歴史や祀りの中で生きてきました。しかし、トキは明治中期以降、その数が急速に減っていったのです。

県内で野生状態で観察されるトキ科の鳥たちは、クロトキ、ヘラサギ、クロツラヘラサギなどが知られています。このいずれもが個体数が少なく、「絶滅のおそれ」ありとされています。ではなぜ、このような事になっていったのでしょうか。トキを中心に考えてみましょう。

明治に入り外国から新しい銃が輸入され、また、日本産の銃も作られるようになり、銃を使って猟をする人口が増加しました。このため、ツル・ハクチョウ・ガン・トキなどの大型の野鳥たちは標的となり、狙われるようになりました。

そして、トキは商業的に狙われるようになり、羽布団の素材、茶の湯や養蚕業の塵払いのための羽根箒、そして、帽子のかざりとして輸出用に、また、トキの弓なりのくちばしは洋服かけや帽子

かけに使われました。

これまで、人間が自分の生活のためということで狩りをしてきたのが、獲物が商業目的で取り引きされるようになってからは、違う目的で狩りがされるようになってきます。

この狩猟の対象は鳥類ばかりではなく、多くの野生動物の生存にとって大きな脅威となってきました。ニホンオオカミやカワウソも狩猟の対象となり、数を大きく減らして、日本では絶滅したものとなっています。

自然界では、生物同士は有機的に絡まり合い、生息しています。そして、その数も食べられるもの（被食者）と食べるもの（捕食者・天敵）との「食物連鎖網」でつながりあい、調節されています。この事で被食者が数を減らすことを「捕食圧」と呼びますが、これによって、生態系は数のバランスが保たれています。ところが、人間が商業目的で狩りを行うと、この自然界で成り立っている数のバランスが崩れます。

トキをはじめとする多くの絶滅の危機に瀕しているものの多くは、天敵の「捕食圧」ではなく、人間の「捕獲圧」によって数が激減していったのです。すなわち、狩猟や、利用のための捕獲や無差別な殺りに代表される直接的な影響が数の減少につながったものと考えられます。

また、有害物質などによる環境汚染、それまで天敵がいなかった場所への人為的な生物の移入、また、交通事故や電線などによって引き起こされる間接的な影響も考えられます。多くの場合には、この両者の複合的なはたらきによって、種の絶滅する時間単位は急速に早まっていると考えられます。

自然界における生物の絶滅の過程は、何百万年という時間単位で起こるものです。一方、人間がもたらした生物種の絶滅は、人類が生物の記録を勢力的に行い始めた過去300年の歴史の中でもすでに、200種類以上のほ乳類や鳥類がこの地球上から姿を消してしまい、現在でも、絶滅の危

機に瀕している生物たちは数多く見られます。これは「人間が他の野生生物の生存に大きな脅威となっている」と考えられます。

今回、トキの剥製が収蔵されているとの情報を得て、三養基高校を尋ねてみました。そこには、確かに剥製になったトキが収蔵されていました。トキ以外にも、アホウドリやヘラサギ、ミサゴといった「絶滅のおそれがある」とされている、鳥類剥製になったの標本を見ることができました。

今後、絶滅のおそれがあるこれらの生物の生存

にこれ以上脅威を与えるような行為は厳に慎むべきものと考えます。

また、今回は三養基高校からの情報でしたが、このように貴重な標本が県内各地の様々な施設に収蔵されていると思われます。剥製となったさまざまな生物たちに対しては、学術的な見地からその標本を保存することが今、改めて求められています。県内の様々な施設の、どこに、どのような標本が収蔵されているのかを調査し把握してゆくことが肝要と考えられます。

(学芸課主事 久我 浩人)



トキの剥製 (佐賀県立三養基高等学校所蔵)

研究ノート

古賀穀堂像の作者について

・穀堂像の寄贈

古賀淑子氏から当館へ、資料49件の寄贈を受けたのは昭和62年(2/19受入)のことである。

古賀家は、佐賀出身で幕府儒官となった精里(1750-1817)をはじめ、精里長男の穀堂(1778-1836)、次男の洪晋城(1781-1832)、三男の侗庵(1788-1847)、穀堂長男の素堂(1813-58)、侗庵長男の茶溪(1816-84)など、すぐれた学者を輩出している。

寄贈資料のなかに、穀堂の肖像画(絹本着色、107.0cm×41.0cm、掛幅表、1幅)がふくまれていた。

この穀堂像は、袷姿で正座する晩年の姿をえがくもので、繊細な描写によって、穀堂の厳格な表情がよくとらえられている。だが、同像に作者の落款はなく、その後の調査を中断していた。

・作者の手がかり

穀堂に学んだ人物に、多久出身の儒学者草場佩川(1787-1867)がいる。

佩川は、文化元年(1804)18歳で佐賀藩校弘道館に入学、当時、同教諭をつとめていた穀堂に学び、同年、穀堂から「珮川」の号をさずかっている(のちに「佩川」に改める)。また、佩川は長崎の江越繡浦に画を学び、画家としても知られる。

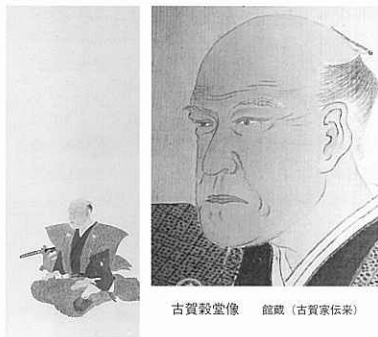
数年前、「草場珮川日記」(三好嘉子校註・解題 西日本文化協会 上・昭和53年/下・同55年、以下、「珮川日記」と記す)の天保8年(1837)2月3日に、「劉天子肖像十数図、未得其勞鼎」という記述があることを知った。佩川が穀堂像をえがいているのである。

本稿では、古賀家伝来の穀堂像が、佩川筆であるかどうかについて考えてみたい。

・穀堂と佩川

穀堂は、弘道館教授の後、文政2年(1819)から江戸で第十代佐賀藩主となる鍋島直正(1814-71)の教育にあたり、天保元年(1830)に直正が藩主となってからも直正を補佐、天保7年(1836)9月16日、59歳で歿している。

穀堂については、学者としての名声に加え、先進的な藩主として知られる直正に対する多大な影響力が高く評価されている。



古賀穀堂像 館蔵(古賀家伝来)

さて、珮川日記には穀堂の死去前後につきのような記述がみられる。

- ・天保7/9/2、穀堂病す、すでに危篤
 - ・同年9/18、訃報をえる
 - ・同年10/17、祭文なる
 - ・同年10/26、穀堂の墓にまいる
 - ・天保8/2/3、肖像十数図、未だその勞鼎をえず
 - ・天保9/9/16、穀堂三回忌、小祠祠堂に拝す
- 珮川は、天保6年(1835)から弘道館に奉職しており、穀堂は学問の師であると同時に、弘道館の先輩として密接な関係が続いていたのである。

・珮川日記にみる肖像画

珮川日記から、穀堂像を含め次の8点の肖像画を制作したことが知られる。

- ① 多久茂孝像 文化10年(1813) 6/4、27歳作
- ② 野田忠尊像 文政5年(1822) 3/22、36歳作
- ③ 山領主馬像 文政6年(1823) 2/27、37歳作
- ④ 佐野常昭像 文政8年(1825) 12/6、39歳作
- ⑤ 多久茂階像 文政10年(1827) 11/6、41歳作
- ⑥ 古賀穀堂像 天保8年(1837) 2/3、51歳作
- ⑦ 古賀朝陽像 天保9年(1838) 1/22、52歳作
- ⑧ 神代利郷像 安政2年(1855) 12/7、69歳作

珮川は花鳥画を得意とした。一方、人物画は少なく、同時代人物の肖像画については、これまで展覧会等で作例が紹介されたことがない。



多久茂孝像 多久市郷土資料館所蔵
(絹本着色 97.6×56.7 掛幅装 1幅)



・現存作品との比較

今年になって、県内の個人のもとに佩川落款の佐野常昭像が所蔵されているとの情報をえた。この常昭像には、文政8年12月に記された佩川の賛があり、④そのものであることがわかる。

また、佩川がつかえた多久邑主多久家伝来で、多久市郷土資料館所蔵の多久茂孝像、多久茂隣像の両像が、①ならびに⑤であると考えられる。

このたび、所蔵者の御厚意により、これら佩川が制作した三つの肖像画を実現する機会をえた。

その結果、体の向きが同じで比較が容易な常昭像、茂隣像と穀堂像とは、つぎのような共通点をみいだすことができた。

まず、顔の描写では、皺の微妙な隈取り、目頭の下、および目尻の下あたりの二、三本の皺、鼻梁から鼻孔まで一続きにひかれた輪郭線など。

また、着衣では、衣の輪郭線及び衣皺線にほどこされた金泥による括りなど。

さらに、人物の背後に刀と刀掛が置かれ、その装飾描写(刀の掛け緒など)も共通している。

・穀堂像の意味

以上のことから、穀堂像の作者は佩川である可能性が高く、また、穀堂の肖像画をえがく画家として、佩川はふさわしい人物である。

しかしながら、茂孝像、常昭像、茂隣像では、細部まで丁寧な描写により、各像主の個性がより印象深くとらえられているのに対して、穀堂像では頭髪のはえぎわに塗残しがあるなど、省略気味にえがかれ、比較的あっさりとした仕上がりになっている。この相違は、何によるものだろうか。

佩川は、天保8年2月3日に穀堂肖像十数図をえがきながら、本人を男髯とする出来でなかつたと記述している。また、それ以降、肖像画が完成したとする記述はみられないのである(但し、佩川日記は、天保8年5月14日から同年10月末まで略されている)。

したがって、古賀家に伝来したこの穀堂像は、天保8年2月3日にえがかれた十数図のうちの一図であるとも考えられ、ついに佩川が納得する穀堂像は制作されなかつたのではないだろうか。

(学芸員 福井 尚寿)



佐野常昭像 個人所蔵
(絹本着色 90.6×39.0 掛幅装 1幅)



多久茂隣像 多久市郷土資料館所蔵
(絹本着色 110.0×48.7 掛幅装 1幅)



行事案内

■平成11年度博物館企画展「近代化の軌跡—幕末佐賀藩の挑戦」関連講演会

[会場美術館1号展示室《聴講無料／予約不要》]

日 時	講 師	演 題
11月6日(土) 13:30～15:30	杉谷昭(久留米大学教授・佐賀大学名誉教授)	鎖国から開国へ—幕末佐賀藩の先進性—
11月13日(土) 13:30～15:30	本多美穂(当館学芸員)	反射炉と蒸気船—佐賀藩近代化の軌跡—
11月20日(土) 13:30～15:30	清水慶一(国立科学博物館理工学第4研究室長)	幕末日本の近代化遺産

■博物館土曜講座「書画骨董のみかた」後期

[前期にひきつづき開講するもので、前期受講者以外の聴講はできません]

回	日 時	担 当	題 目
第5回	10月30日(土) 13:30～	宮原香苗(当館専門員)	染 織
第6回	11月27日(土) 13:30～	山崎和文(当館学芸員)	民 具
第7回	12月4日(土) 13:30～	蒲原宏行(当館資料係長)	土 器
第8回	12月11日(土) 13:30～	野中耕介(当館学芸員)	洋 画

日 誌

■平成11年度博物館実習

期 間：6月21日(月)～7月2日(金)

8:45～17:00

実習生：17名(北九州大1名、西南学院大学2名、
福岡大学1名、佐賀大学5名、筑紫女学院大学1名、
神奈川大学1名、鳥取大学1名、九州産業大学5名)



博物館実習(梱包実習)

■美術館第16回実技講座「石膏デッサン教室」

期 間：8月3日(火)～6日(金)

14:00～16:00

会 場：美術館画廊・研修室

講 師：山下智樹先生(独立美術協会 会友)

受講生：30名



石膏デッサン教室

佐賀県立博物館・美術館報 第123号

平成11年9月20日

編 集 発 行 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館

〒840-0041 佐賀市内1-15-23 ☎ 0952・24・3947 ☎ 0952・25・7006

印 刷 (有)光版社